

* 本レポートは、大学のゼミで「ゼミ論文」として書かれたものです。ここでは、前半の第1章、第2章を省略し、「はじめに」、第3章、第4章、「おわりに」、文献情報を掲載します。

札幌市における病児保育の現状と課題

経済学部経済学科2部4年

本吉明美

はじめに

平成13年6月の政府の男女共同参画会議の最終報告案では、待機児童ゼロ作戦 両立ライフへ職場改革 多様で良質な保育サービスの実現 放課後の児童対策 地域での子育て を5本柱に待機児童数をゼロにするための具体的な数値目標が設定された。今後も少子高齢化の進展が予想され、生産年齢人口の減少からさらに仕事を持つ女性が増加することが考えられる。両親にとっても保育園に預けられる児童にとっても、良好な養育環境が整うことは重要である。ただ単に待機児童がゼロになれば良いというものではなく、保育サービスに求められるものは多様で良質なサービスである。また、「平成10年度厚生科学研究報告書 少子化についての専門的研究」における「育児と仕事の両立のために企業が整備する必要があるもの」の質問に対して、共働きの妻がトップにあげたものは、「子どもの病気の際の看護休暇」であった。働く女性にとって、こどもが病気になったとき、「ケアをする権利」つまり労働環境の整備によって休暇をとって看病できることと、「ケアを受ける権利」病気であっても親が安心して預けられるような保育サービスの利用が可能なことの両方が保障されることが必要である。そこで今回は、病児保育について取り上げ、現状とその課題について考えてみたい。

<省略した部分>

保育政策の歴史

病児保育の現状

1 病児保育とは

2 病児保育の現状

1) 全国の状況

2) 札幌市の状況

3) 札幌市乳幼児健康支援サービスセンターの利用状況

働く親の病児保育への意識と要望

札幌市内にある乳幼児健康支援サービスセンターの利用状況としては、前述したとおりであるが、実際の利用者側の実態・ニーズとあったものであるのだろうか。乳幼児健康支援サービス事業導入にあた

っての札幌市の調査結果を踏まえ、今回札幌市内の認可保育所に子どもを預けている親を対象に意識調査を実施した。

1 乳幼児健康支援デイサービス事業導入にあたっての札幌市の調査結果

この調査は、平成9年1月に乳幼児健康支援デイサービス事業および日曜祝日保育事業に関する需要や利用の意向を把握し、利用しやすい保育所づくりの基礎資料とすることを目的に札幌市が、札幌市内の認可保育所を利用している全世帯を対象に実施したものである。

その結果として、以下のような実態と病児保育に対する要望があった。

過去1年間に病気で保育所を休んだ回数は、「1度もない」が6.6%、「1～5回」が最も多く49.1%、「6～10回」が23.6%、「11～15回」が6.9%、「16～20回」が6.5%、21回以上は合わせると7.3%であった。

子どもが病気で休んだときの対処方法としては、「母親が仕事を休む」が66.5%でトップである。ついで、「同居していない親族にみてもらう」が16.2%であり、「父親が仕事を休む」は1.8%、「病気の子どもを受け入れる施設でみてもらう」は0%、有料のベビーシッター・家政婦にみてもらう」は0.7%と極めて少なく、子どもの看病は家庭で母親が対応していることが多い。また、実際に母親が仕事を休んだ日数は、父親では1度も子どもの看病のために休んだことがない「0日」が51.3%、「1～5日」が18.8%「6～10日」が3.7%、「11日以上」が1.8%であった。それに対して、母親は「0日」が4.7%、「1～5日」が25.5%「6～10日」が25.6%、「11～15日」が11.3%、「16～20日」が11.6%、さらに21日以上休んだ母親は合わせると14.5%であった。

過去1年間で病気で保育所を休んだ回数は、「1～5回」が全体の49.1%と最も多く、次いで「6～10回」が23.6%、「11～15回」は6.9%、「16～20回」は6.5%、「1回も休まなかった」は6.6%であった。

保育所を休む理由となった病気は、「風邪」が最も多く全体の85.6%で次いで、「水痘」が21.9%、「流行性耳下腺炎」が11.0%となっている。

乳幼児健康支援デイサービス事業の認知度としては、平成9年1月1日の時点では知っている」が15.4%と極めて低い。また、その必要性に関する意識としては、「子育てと仕事の両立を考えると当然必要な制度である」が16.6%、親が看護すべきだが、現実には必要」が27.2%、「親が休暇をとれる環境整備が第-だが、現実には必要」が48.4%で条件つき賛成も含めると9割以上が必要と答えている。

望ましい実施形態としては、「現在利用している保育所に併設して設置」が42.7%と最も多く、ついで「医療機関に設置すべき」という考えが24.8%であった。

乳幼児健康支援デイサービスセンター事業を実施した場合の利用意向としては、「ぜひ利用したい」が31.6%と「利用したい」の47.7%を合わせると全体の約8割が利用を希望しており、「利用しない」と回答したのは18.8%であった。

2 働く親の病児保育に関する意識調査の結果

1) 調査の概要

札幌市内の認可保育所に子どもを預けて働いている親118名を対象に保育所を通じて調査票を配布、回収した。調査期間は平成13年11月20日～12月3日、回収数は73通（回収率：61.9%）であった。

2) 調査結果

調査回答者の属性としては、回答者の約9割が母親であり、残りの1割が父親でありそれ以外の立場の人は

いなかった。また回答者の年齢は、表1のとおり「30～34歳」が32.9%、「35～39歳」が38.4%と30歳代が7割を占めた。ついで20歳代が19.2%、40歳代が9.6%であった。常勤者は90.4%、非常勤者は8.2%であった。職種としては、表2のとおり「専門職」が26.0%、「公務員」と「自営」が16.4%であった。勤務形態としては、「始業・終業が定時である」は、60.3%、「自分で調整可能」は20.5%、「交替勤務がある」は9.6%であった。1週間の勤務の時間は、表3のとおり「30時間以上40時間未満」が35.6%と一番多く、ついで「40時間以上50時間未満」が34.2%、「20時間以上30時間未満」と「50時間以上」が13.7%となっており、30時間以上が8割を占める。残業については、ないまたはまれに残業があるものは58.9%で、ほとんど毎日またはしばしば残業するものは31.5%であった。こどもの年齢は、表4のとおりで、2歳未満が35.6%、2歳以上が64.4%であった。

過去1年間に病気で保育園を休んだ日数

過去1年間に病気で保育園を休んだ日数は、表5のとおりであった。1日も休んだことがない「0日」は5.5%であり、「1～9日」が39.7%と一番多く、「10～19日」は20.5%であった。20日以上休んだ人は合わせると34.2%になり、全体の約1/3を占める。これは札幌市の調査と比較しても高い数値となっており、通常の有給休暇で対応できる範囲を超えていると思われる。

こどもの看病のための休暇のとりやすさ

表6のとおり、こどもの看病のために休暇がとれる人は、「必ず休める」人と「休めないときもある」人を合わせると全体の80.8%であり、「通常休めない」、「休めない方が多い」人は17.8%であった。看病のための休暇がとれない主な理由としては、表7のとおりで、「仕事の予定に変更がきかない」が、46.6%と一番多く、次いで「同僚に負担をかける」、「代わってもらうわけにはいかない」が理由としてあがっているが、「こどもの病気では理解が得られない」、「有給休暇が不足しているから」も8.2%であった。

職場の状況としては、ほぼ8割の人が看病のための休暇をとることができている。しかし、その他の人は、常勤者で専門職が多いことから職種によっては休みが取りにくいことや、同僚への気兼ねや看病で休むことに理解が得られないなど職場の環境によって休暇が取りにくい状況にあることがうかがえる。また、こどもの病気で休みを取らなければならないため、自分の体調が悪いときには有給休暇が使えないという回答者もいた。看病のための休暇は取れても、間接的に親の健康状態に影響するなど他にしわ寄せがきていることがあることもわかった。

保育の代替者の有無

病気で登園できないときの保育代替者の有無については、表8のとおりで「ほとんど頼める人はいない」、「全く頼める人はいない」人が20.6%であった。また、代替者がいる場合その立場としては、表9のとおりで回答者の「母親」、「義理の母親」が多かった。「配偶者」は16.4%であり、回答者の9割が母親であったことから、男性である父親が母親に代わって看病することは少ないことがわかる。ここからも、こどもの看病は施設や第三者ではなく、家族・親戚が主になっており、特に代替者を持たない場合は女性である母親への負担が大きいことが伺える。

こどもが病気になったときの親の気持ち

こどもが病気になって困ったことがあったかの問に対しては、「大変困ったことがある」が38.4%、「少し困ったことがある」の49.3%を合計すると87.7%の人が困ったことがあると答えている。

次に、こどもが病気のとくに経験したことや感じたことについては、15の質問に対して表10のような結果が

得られた。回答の「まったくない」、「まれにある」を選択したものを「なし群」、「しばしばある」、「いつもある」を選択したものを「ある群」として比較していく。こどもの看病のために休みをとることの気兼ねについては、ある群が6割であったが、気兼ねがないものも6.8%であった。また、こどもの看病のために休むと同僚に申し訳ない気持ちになる人が、同様に6割を越えていた。こどもの看護のために休むと職場の上司や同僚から苦情を言われる人は、10.9%であった。保育園を休ませるかどうかの選択に関わることとして、少々熱があっても座薬などの薬を使って保育園に預けたことがあるかについては、「まったくない」を除くと41.1%の人が1度はそのような経験をしたことがあった。また、本当はもう1日休ませたいと思ってもなかなかできない人が46.6%いた。こどもが病気のとき、保育園に預けて仕事をしていても連絡がくるのではとビクビクしながら仕事をしている人が26.0%おり、実際に連絡が入った経験がある人も24.7%と1/4を占めた。また、こどもが病気のときに他者に看病を依頼するのに抵抗がある人は、43.9%おり、こどもに対しての気持ちとしては、すまない気持ちになる人が、35.6%いた。保育サービスの不足に腹がたった人が23.3%、なぜ自分ばかりつらい思いをするのか理不尽さを感じる人も21.9%いた。子育てに関しては、自信をなくした人が17.8%、こどもをもつことがつらいと感じた経験がある人は10.9%であった。さらに仕事を続けていく自信をなくした人も43.9%いた。

以上のことから、こどもの看病のために仕事を休むことに対しては、半数以上の人が気兼ねを感じており、またこどもに対してはすまなさを感じるなど職場と自分のこどもの両方に対して引け目を感じる人が多いと考えられる。また、こどもが十分に回復していなくても保育園に預けた経験がある人が4割おり、実際に具合が悪くなり迎えが必要になるなど病児にとって回復に必要な十分な休息が得られていないことが推測される。こどもが病気のときに他者に看病を依頼することに抵抗がある人も多く、保育園または保育の代替者にためらいなく安心して預けているわけではない。このようなことが繰り返し経験されることで、働く親は仕事と子育ての間でさまざまなマイナスの感情を経験することが多いと思われる。

デイスサービスセンターの認知度及び登録・利用状況

デイスサービスセンターの認知度については、「知っている」が80.8%、「知らない」が19.2%であった。しかし、知っている人についても表13のとおり、「登録している」は8.5%であり、「登録する予定はない」と答えた人が66.1%と2/3をしめた。その理由については表16のとおりで、第一に「自宅から遠くて不便である」ことを71.8%の人があげている。また、「現在は必要がない」が35.9%、「利用の際の手続きが面倒」が20.5%、「登録するのが面倒」が15.9%と手続きに対する理由が続く。登録しているが、利用したことがない人の理由も表14のとおりで、同様に第一が「自宅から遠くて不便」であり、ついで「手続きの面倒さ」や「利用したくても満員で出来なかった」があった。今後利用してみたいが、現在登録していない人の理由としては、「現在は必要にせまられていない」という理由が多かった。自家用車が使用できない場合、具合の悪い乳幼児を連れて公共の乗り物を使用して移動することは困難でありタクシー代と利用料金の両方の負担は大きいという意見もあった。

認知度については、導入前の調査と比較すると逆転しているが、実際に利用したことがある人は1人もおらず、登録者も少ない。代替者がいない人もおり、ニーズはあると考えられるが、結局は立地条件や手続きの面倒さから、利用しにくく、利用してみたいと思えるサービスになっていないことがわかる。

病児保育に関する要望

病児保育への要望としては表12のとおりで、「現在利用している保育園への病児保育の併設」を要望する人が、58.9%と最も多かった。次いで、「こども看護休暇の制度化」が30.1%、「病児保育を行う施設数の増加」が21.9%、「病児保育利用時にあたったの手続きの簡略化」が16.4%、現存するデイスサービスセンターの定員

の増加や施設・スタッフの充実の要望は合わせると12.3%であった。

導入前のアンケートの結果と同様に、現在利用している保育園への併設を要望する人が、最も多く、病気の時でも安心して預けられる環境、利便性を考慮した結果の要望であることが伺える。また、同時に看病のための休暇が制度化の要望もあり、単に施設でのサービスの充実だけでなく、こどもがいることで仕事に関して不利益を被る事なく、こどもが病気の時には自分も看病したいという親のニーズがあることがわかる。

考察

これまで、第 3 章において札幌市の病児保育の現状を検討し、さらに第 4 章で働く親の意識調査の報告を行った。病児保育の現状からわかったことは、札幌市内における乳幼児健康支援サービスセンターの定員は、1センター4名で2センター合わせてわずか8名であるにもかかわらず、この8名の枠が有効に利用されていないことである。また、働く親の意識調査からは、

1. 過去1年間にこどもが病気のために保育園を休んだ日数は、通常の有給休暇を超える20日以上であった人が回答者の1/3を占めていた。
2. ほぼ8割の人がこどもの看病のために休暇を取れるが、残りの2割の人は休めないまたは休めないことの方が多い。
3. こどもの看病のために休暇をとることに気兼ねがある人が6割であった。
4. 病気で登園できないときの保育の代替者が確保できていない人は2割であった。
5. こどもが病気のときに他者に看病を依頼することに抵抗がある人は4割であった。
6. 乳幼児健康支援サービスセンターについては、8割の人が知っていたが、登録している人は、その1割にも満たなかった。

という6つの結果が得られた。また、今回の調査では回答者の9割が母親で女性であったが、男性と比較して看病のために休暇をとる比率は札幌市の調査でも女性の方が圧倒的に高く、女性は仕事と看病の両方に対して責任を担っている。

こどもが病気になった時の親の気持ちとしては、約8割の人が保育の代替者を持っているにもかかわらず、こどもが病気のときに他者に看病を依頼することに抵抗を感じる人も多く、親の気持ちの部分を考えてとき必ずしも代替者がいるからといって安心して仕事に打ち込めるわけではない。こどもが病気になると仕事とこどもに関連したさまざまな葛藤や苛立ちが生じ悩みも多く、ストレスが大きいことがわかった。一方、病気であるこどもの立場で考えたときにもやはり問題がある。十分に回復していなくてもやむを得ず、保育園に預けた経験がある親が4割もいたことから、回復期とは言え身体的に無理な負担がかかっていることが予想される。

これらのことから、病児保育へのニーズは十分高いと思われるが、なぜ決して多いとは思われないサービスの定員に満たないのであろうか。このことについて検討する必要がある。意識調査の結果からは、

1. 自宅から遠くて不便である
2. 登録するのが面倒・利用の際の手続きが面倒である

の以上2つの理由を挙げることができる。札幌市内に2カ所の設置であり、移動に要する時間や費用が自宅から遠くなればなるほど大きくなる。また、この調査の回答にはあがってこなかったが、利用するには利用希望日の前日までに実施施設に空き状況を確認し予約をし、さらに医療機関を受診し「利用連絡書」を発行してもらう必要がある。予測の難しいこどもの病気に関することが「予約制」ということ自体現実的でない上に、現在の利用方法では、実際にサービスセンターで預かってもらうまでの手続きが簡便ではない。対象を保護者が勤務の都合などの理由によって家庭で保育できない児童と定めているが、どうしても勤務の都合で休めない

日にこどもを預けたいと思っても、これらの手続きをすべてクリアしなければならないのであれば、通常仕事に間に合う人はやはりこのデイサービスセンターの近隣に居住しているか、職場がある人に限られるであろう。

以上のことから、通常の保育園では病児の保育を行わないことから、保育サービスの多様化という点では、乳幼児デイサービスセンターは、その部分を補うものとして存在の意義は十分にある。しかし、現在の制度、札幌市における8名という定数とシステムでは、働く親のニーズを満たすだけの質と量において不足があると言わざるを得ない。サービスの提供者側と利用者側とのギャップが大きい。では、どのようなサービスであれば、利用できるサービスとなるのであろうか。その条件としては、

1. 定数の増加により利用したいときに利用できること
2. 居住地または職場の近くにあることなど個々の利用者にとって預けやすい立地条件であること
3. 手続きが簡単であること

の3つがまず考えられるが、以上の条件を満たし病気のこどもにとって良い環境であって、親も安心して預けられる病児保育としては、やはり「現在預けている保育園への併設」が最も望ましいと考える。この方法であれば、こどもにとっても慣れた環境であり、病気で体調が悪いときに初めての場所・初めて会う保育者に囲まれることでの恐怖心や不安感を経験することもない。いつも通っている保育園であれば、現在記入が必要な「利用申込書」の簡略化が可能であり、細かな日常生活についての報告が少なくすむこと、移動の困難さが少ないことが考えられる。

厚生労働省の「第一回二一世紀出生児縦断調査」によれば、平成13年1月出生児の母親の勤めに出ている割合は出産1年前の48.4%から、出産半年後には19.2%に減少しているという結果になっている。女性が安心してこどもを産み、子育てをしながら働ける環境の整備なしには、現在の少子化の進行をくい止めることはできない。こどもが病気になっても、親が安心して職業生活と子育てを両立できるための条件としては

1. 病児保育の整備・充実
2. こども看護休暇の制度化
3. 男性の育児参加への社会的認知

の3つが整うことが必要不可欠である。これまで述べてきたように「病児保育の整備・充実」は言うまでもないが、こどもが病気になったときの親の気持ちとしては、「保育園でみてもらいたい」という希望は一番少なく、「出来る限り自分が自宅で看病したい」という人が半数以上であった。このことから、ただ単に病児保育というサービスの利用が可能であるといった「ケアを受ける権利」へのニーズだけでなく、自分のこどもが病気の時側について看病したいという「ケアをする権利」へのニーズも高いことがうかがえる。この後者に対してのニーズを満たすためには、「こども看護休暇の制度化」が必要である。そして親の心情を考慮すると、この2つの制度の整備・充実を前提に各々が状況に応じてどちらかを選択できることが、より望ましいと言える。また、今回の意識調査でも札幌市の調査においてもこどもの看病のために休暇をとるのは、圧倒的に母親が多かった。男性の場合、こどもの病気を理由に仕事を休むことは困難であることが多い。周囲もまた母親自身も看病は当然母親の役割であるとの認識があり、母親だけが看病に関連したストレスを受けている状態である。このようにこどもの病気に関しての責任が女性だけに課せられるものであれば、今後も少子化をくい止めることはできないであろう。そのためにも、男性の育児参加への社会的認知度を高め、男性であっても職業継続に影響なく、こども看護休暇が取得できるなどの社会環境の整備が求められる。

おわりに

近年、少子化が急速に進展する中、安心してこどもを産み育て、男女を問わずその能力を十分に発揮するこ

とができる社会環境を整備することが重要となっている。報告者も3歳の子を保育園に預け仕事を継続しているが、やはり乳児のころは病気になり保育園を休まなければならないことが頻繁で、その時の調整に苦労した経験から今回、病児保育に関して取り上げた。保育に関しては、仕事と家庭の両立支援対策として現在さまざまな変化が起きている最中であり、今後とも動向に注目していきたいと考えている。

最後にアンケートに協力して下さった父母の皆様、月寒乳児保育園・月寒保育園の園長先生を初めとする職員の皆様、病児保育の現状についてお話下さった天使こどもデイサービスセンター・北海道社会保険こどもデイサービスセンターの職員の皆様に心から感謝しお礼を申し上げたいと思う。

<引用文献>

- 1) 西山佐代子：「日本の保育政策 - 戦後の保育ニーズと供給政策の変遷を中心として - 」北海学園大学経済論集 第49巻 第2号（通巻第147号）2001年9月 p95
- 2) 前掲 p110

<参考文献・参照URL>

- 1) 全国保育団体連絡会・保育研究会編：『保育白書1999年版』草土文化、1999年
- 2) 全国保育団体連絡会・保育研究会編：『保育白書2000年版』草土文化、2000年
- 3) 厚生省編：『平成8年版 厚生白書 家族と社会保障 - 家族の社会的支援のために - 』ぎょうせい、1996年
- 4) 前田正子：『保育園は今』岩波書店、1999年
- 5) 日本子どもを守る会編：『こども白書 2000年版』草土文化、2000年
- 6) 札幌市民政局児童家庭部：『乳幼児健康支援デイサービス事業、日曜・祝日保育事業等に関する調査結果』
- 7) 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/>
- 8) 「仕事と子育ての両立支援策について」2001年6月、首相官邸ホームページ
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/danjyo/0619danjyo.html>

表1 回答者の年齢

(n=73)		
年齢(歳)	人数(人)	割合(%)
～20	0	0.0
20～24	1	1.4
25～29	13	17.8
30～34	24	32.9
35～39	28	38.4
40～44	6	8.2
45～49	1	1.4
50～	0	0.0

表4 こどもの年齢

(n=73)		
年齢	人数(人)	割合(%)
1歳未満	9	12.3
1歳以上2歳未満	17	23.3
2歳以上3歳未満	15	20.5
3歳以上4歳未満	12	16.4
4歳以上5歳未満	6	8.2
5歳以上	14	19.2

表2 回答者の職種

(n=73)		
職種	人数(人)	割合(%)
公務員	12	16.4
事務・企画	6	8.2
営業	6	8.2
販売	5	6.8
専門職	19	26.0
製造	1	1.4
自営	12	16.4
その他	10	13.7
無回答	2	2.7

表5 過去1年間に病気で保育園を
休んだ日数

(n=73)		
日数	人数(人)	割合(%)
0日	4	5.5
1～9日	29	39.7
10～19日	15	20.5
20～29日	15	20.5
30～39日	4	5.5
40日以上	6	8.2

表3 1週間の勤務時間

(n=73)		
時間数	人数(人)	割合(%)
10時間未満	1	1.4
10時間以上20時間未満	0	0.0
20時間以上30時間未満	10	13.7
30時間以上40時間未満	26	35.6
40時間以上50時間未満	25	34.2
50時間以上	10	13.7
無回答	1	1.4

表6 こどもの看病のための休暇の取りやすさ

(n=73)

	人数(人)	割合(%)
必ず休める	20	27.4
休めないときもある	39	53.4
休めない方が多い	8	11.0
通常休めない	5	6.8
その他	0	0.0
無回答	1	1.4

表7 看病のための休暇がとれない主な理由

(複数回答可)

(n=73)

	人数(人)	割合(%)
仕事の予定に変更がきかない	34	46.6
代わってもらう訳にはいかない	16	21.9
同僚に負担をかける	22	30.1
仕事の量が多くて休める余裕がない	14	19.2
上司や職場に休めない雰囲気がある	2	2.7
こどもの病気では理解が得られない	6	8.2
有給休暇が不足しているから	6	8.2
その他	0	0.0

表8 代替保育者の有無

(n=73)

	人数(人)	割合(%)
いつも必ず頼める人がいる	9	12.3
だいたい頼める人がいる	24	32.9
ときに頼める人がいる	25	34.2
ほとんど頼める人はいない	11	15.1
全く頼める人はいない	4	5.5

表9 回答者と保育代替者との関係

(複数回答可)

(n=73)

	人数(人)	割合(%)
配偶者	12	16.4
あなたの母親	35	47.9
あなたの父親	7	9.6
義理の母親	21	28.8
義理の父親	3	4.1
兄弟	1	1.4
姉妹	4	5.5
近所の知人	2	2.7
友人	2	2.7
ベビーシッター	2	2.7
その他	7	9.6

表10 こどもが病気のときに経験したことや感じたこと

質問内容	(n=73)				
	まったくない	まれにある	しばしばある	いつもある	無回答
1. こどもの看病のために休みをとることに気兼ねがある。	6.8%	30.1%	23.3%	38.4%	1.4%
2. こどもの看病のために休むと職場の上司や同僚から苦情を言われる。	50.7%	35.6%	6.8%	4.1%	2.7%
3. こどもの看病のために休むと同僚に申し訳ない気持ちになる。	9.6%	21.9%	23.3%	41.1%	4.1%
4. 少々のお熱があっても、座薬などの薬を使って保育園に預けたことがある。	57.5%	30.1%	11.0%	0.0%	1.4%
5. 本当はもう1日保育園を休ませたいと思っても、なかなかできない。	19.2%	31.5%	28.8%	17.8%	2.7%
6. 夫婦間でどちらが休みをとるかでもめる。	67.1%	21.9%	4.1%	1.4%	5.5%
7. 工作中、こどもの体調が悪くなり迎えに来よう連絡が入ることがある。	9.6%	63.0%	23.3%	1.4%	2.7%
8. 保育園から連絡が来るのではないかとビクビクしながら仕事をするこがある。	26.0%	46.6%	21.9%	4.1%	1.4%
9. こどもに対してすまない気持ちになる。	12.3%	52.1%	16.4%	19.2%	0.0%
10. 保育サービスの不足に腹がたった。	56.2%	20.5%	12.3%	11.0%	0.0%
11. なぜ、自分ばかりつらい思いをするのか理不尽さを感じる。	42.5%	34.2%	15.1%	6.8%	1.4%
12. 仕事を続けていく自信がなくなる。	42.5%	34.2%	12.3%	9.6%	1.4%
13. 他者に看病を依頼することに抵抗がある。	8.2%	47.9%	19.2%	24.7%	0.0%
14. こどもをもつことがつらいと感じる。	53.4%	35.6%	4.1%	6.8%	0.0%
15. 子育てに自信がなくなる。	45.2%	37.0%	11.0%	6.8%	0.0%

表11 こどもが病気になったときの気持ち(複数回答可)

	(n=73)	
	人数(人)	割合(%)
出来る限り、自分が自宅で看病したい	42	57.5
保育園でみてもらいたい	4	5.5
こどもの病状や勤務の状況に応じて、自宅か保育園が選択したい	42	57.5
その他	2	2.7

表12 病児保育への要望(複数回答可)

	(n=73)	
	人数(人)	割合(%)
病児保育を行う施設数の増加	16	21.9
現在利用している保育園への病児保育の併設	43	58.9
現在あるデイサービスセンターの定員の増加	6	8.2
現在あるデイサービスセンターの施設・スタッフの充実	3	4.1
病児保育利用時にあつての手続きの簡略化	12	16.4
こども看護休暇の制度化	22	30.1
特にない	7	9.6
その他	3	4.1

表13 乳幼児健康支援デイサービスセンターの登録・利用状況
及び利用の意欲について

(n=59)

	人数(人)	割合(%)
登録し、利用したことがある	0	0.0
登録しているが、利用したことはない	5	8.5
登録していないが、今後利用してみたい	15	25.4
登録する予定はない	39	66.1

表14 乳幼児健康支援デイサービスセンターに登録しているが、
利用したことがない理由について(複数回答可)

(n=5)

	人数(人)	割合(%)
こどもが病気で休むことがなかった	0	0
自分が看病できた	2	40
自宅から遠くて不便	4	80
料金が高い	0	0
利用の際の手続きが面倒	2	40
満員で利用できなかった	2	40
前日の予約時間に間に合わなかった	0	0
他に看病してくれる人がいた	2	40
その他	0	0

表15 乳幼児健康支援デイサービスセンターに登録していないが、
今後利用してみたい理由について(複数回答可)

(n=15)

	人数(人)	割合(%)
登録の仕方がわからなかった	1	6.7
現在は必要にせまられていない	9	60.0
その他	5	33.3

表16 乳幼児健康支援デイサービスセンターに登録する予定が
ない理由について(複数回答可)

(n=39)

	人数(人)	割合(%)
登録の仕方がわからない	1	2.6
登録するのが面倒	5	12.8
利用の際の手続きが面倒	8	20.5
現在は必要がない	14	35.9
自宅から遠くて不便	28	71.8
その他	6	15.4